

巻頭言 「エイムズ牧師の眼差し」

宇野 元

『ギレアド』の牧師、ジョン・エイムズは、牧師館から歩いて教会に行きます。息子への手紙を書きながら、彼はふと、数年まえの早朝の出来事を思い出します。

ぼくは教会にゆく途中だった。ぼくのすこしまえに、散歩している若いカップルがいた。大雨のあと、つよい日の光が差し、たっぷり濡れた木々がきらめいていた。なんの心のはずみか、単純に幸せいっぱいだったんだろう、男の子が飛び上がって枝の一つを掴んだ。するとふたりの頭のう上に輝く滝がおちた。彼らは歓声をあげ、走って逃げた。女の子は髪と服にかかった雨滴を拭いた。イヤねえ！ というふうに。でもほんとは嫌じゃないんだ。まるで神話の一場面をみているような美しい情景だった。

この世界と人間は、眩しい輝きの中にある。欠けだらけの世界であり人間の営みであるにもかかわらず。また、当の私たち自身の自覚のあるなしにかかわらず。エイムズ牧師は、新しい命の望みを抱きつつ、まもなく自分が後にする世界を、慈しみをこめて眺めます。その眼差しは、私たちの「今」に向けられている神様の眼差しを、はるかに証ししていると思います。

私たちは、憊いなく過ぎゆき、滅び去る存在ではありません。愛の眼差しの前に憶えられています。私たちの一日一日に確かな意味が与えられています。「わたしは復活であり、命である」(ヨハネ 11,25)。罪と死に打ち勝つイエス・キリストの復活を信じるとき、地上にある今の時が永遠と結ばれていることを確信できます。

エイムズ牧師に後押しされて――

ある雨上りの朝。学校に出かける二人。時間が重なったが、自転車が一台しかない。二人乗りでゆくことに決めた。私は出発する二人の姿をデジカメで撮ろうと思いついた。だがデータが一杯。急いで一枚消去して庭に出ると、もう出た後だった。風のように。君たちは恵みの時を生きている。おそらくそれを意識せずに。一人が先に降りるとき、言い合いしたりしたんじゃないか。意識せずに、時を駆け抜けてゆく。本人は苦しい。そのなかに恵みが、溢れるほど豊かに流し込まれている。そして帰らぬ時の一刻一刻が、永遠のスクリーンに刻まれている。